



TITLE:

ルイ・ランベール:バルザックによる知的な青年主人公の創造

AUTHOR(S):

黒崎, 靖子

CITATION:

黒崎, 靖子. ルイ・ランベール:バルザックによる知的な青年主人公の創造. Francia 1965, 9: 57-64

ISSUE DATE:

1965-12-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137509>

RIGHT:

ルイ・ランベール

―バルザックによる知的な青年主人公の創造

黒崎靖子

認識への情熱の導くままに、人間の精神の触知すべからざる領域にふみ入って発狂する、青年思想家の精神史を描いたバルザックのこの作品については、前号で一考察を試みてある。ここでは、“哲学研究”に属する作品が、“人間喜劇”のドラマトルギーとして働いているバルザックの思想体系をあらわすものであることに注目し、この作品の主人公の哲学的探究と心理的かつとうとに、哲学への情熱によって作家形成をはじめたバルザック自身の問題をさぐってみたのだった。今、再びこの作品をとりあげたのは、残された問題、作家バルザックに関する見地をはなれて、ここに描かれている青年の知性史の、アクチュアリテの問題にふれてみたいからである。

(1) ルイ・ランベールのアクチュアリテ＝メーヌ・ド・ピラン

バルザックの主人公と同時代の哲学者メーヌ・ド・ピラン（一七

六六―一八二四）との間に、思想における、性格、心理における、深い類似のみられることは、H・エヴァンス氏によって指摘されている。⁽¹⁾ 発狂その他の外的運命の相違は別として、このバルザックの人物と実在の思想家が示している内面の類似の深さには、たしかに、おどろくべきものがある。天才と狂気という近代のテーマを、思想家の内面のドラマとして始めて克明に描いたバルザックの人物のモデルは、熱心に研究されてきたが決定的なものは見出されていない。

ピランについてはどうか。⁽²⁾ ランベールは彼と同じ年に死ぬという一致まで見られるけれども、世俗的名声をきらって隠遁の中で思索にふけることをねがいとし、その著作はほとんど生前には刊行されず、哲学の専門的な世界でのみ知られていたこの哲学者を、バルザックが知っていたとはほとんど考えられない。“ルイ・ランベール”によって人間の知性の最高の姿を小説化しようとしたバルザック

は、百科全書的な読書によって時代の知的問題を吸収する一方、哲学への情熱にはじまった自身の青年時代の知的生活を再現したのだ。だから、ランベールとビランとの知的心理的類似性は、一つの世代の知性のアクチュアルな問題をあらわすものとして注目されねばならない。

メタフィジックの天分において過去のフランス哲学史上ならぶものではなく、「フランスのカント」と称されたメーヌ・ド・ビランは、その形成においていかなる思想家からも直接の影響をうけたことのない「最も自発的な、独創的な思想家」であった。⁽³⁾ 哲学史における彼の名は、はじめはラロミギエールとともにイデオログの後継者として、後には、ヴィクトル・クルーザン、ロワイニ・コラールら「折衷派」の間に、見出される。イデオログの唯物論から唯心論に、さらに神秘思想へ。この両極に位置する発端から到達点へのビランの思想的発展こそ、ルイ・ランベールの知性史にはかならないのである。以下、その思想の発展と方法と体系とを概観してみよう。

① 唯物論による哲学の出發

メーヌ・ド・ビランは感覺論全盛の時代に思索を始めたので、初期の思想にはコンディヤックの影響がみられる。彼はオットウイユ会にも加わったが、とくに一八〇二年のアカデミー論文「習慣の思惟に及ぼす影響」により、イデオログの重鎮とみられるようになった。しかし、虚弱な体質と病的に鋭い感受性によって、早くから「内部から自己を見つめ、自己とは何かを知らうとする」⁽⁴⁾ 方向を決定されていた彼は、一八〇五年の「思惟の分析論」によって感覺論に対するはげしい攻撃を試み、イデオログと訣別する。

ランベールの思想家としての出發は、神秘主義に浸された幼少時代の中に決定づけられているが、その学問への野心をあらわす「意志論」の思想は、人間の存在の基礎であるエネルギーを物質と考える絶対的な唯物論からなりたっている。⁽⁵⁾ 幼少時代の幻想は別として、ランベールの出發もまた、十八世紀唯物論からである。

② 意志論による人間学の形成

外感の世界に対する内感の世界、人間の受動性に対する自発性の存在を発見した後、ビランは、「心理学の基礎」(一八一二年)において、イデオログの機械論的受動的人間観に対する新しい人間学のシステムをあらわした。ビランの思想は、感覺論者たちによって忘れられてきた自我の自発性と自由とを主張し、人間の存在の基礎を意志に認めた点で、画期的なものであった。人間の具体的な把握は、彼によれば、ただ内感によってえられるのであり、内感を分析してゆきつく人間性の原初的事実は意志による努力感である。また、人間の精神は、すべて、自発性と受動性との相対立する二つの現象をもち、したがって人間の心身の関係は二重である。自発性と受動性との間のさまざまな配合関係により、自我のヴァリエタが生じる。意志の努力によって、自発性を受動性に優越させたとき、自我は最も完成され、自由を得る。

ランベールにとっても、人間性は、生命エネルギーの作用と反作用との対立により、内的人間、外的人間という二重構造であられる。そして、生命エネルギーを支配するものは意志であり、意志力による内的人間への集中という心理学的方法に、自我の統一と人間の精神の力のすぐれた発現とをまとめて、ビランの主意主義的人間学

と同じ立場を示している。ランベールの人間研究は、生理学とともに、占術、交霊術、テレパシー、などの心靈の方向に、魂の不滅の証を求めている点特徴があるが、きびしい実証の精神と鋭い分析によって新しい人間論を体系づけたビランも、内感の探究の重要な一環として、このような超心理学の分野にも手をつけている。

注目すべきことは、ビランの場合もランベールの場合も、哲学は、抽象的思弁ではなく、彼らの個性、内的生活ときりはなしたがたく結びついて発展したということである。こうして、彼らは哲学においてのみならず、その心理において、さらに興味深い類似を示す。虚弱体で、過敏な感受性をもち、きわめて内向的な彼らは、神経質な、分裂型気質の人間である。このような性格の特徴は、過敏であるために必然的に外界、感覚に動かされやすく、その内省への志向との間に常にかつとうを生じることであり、ビランもランベールも、彼らの二重性の人間論を自らの上に演じて苦しむのである。

ランベールにおける肉体と思维との、欲望と理想主義との矛盾は、精神分裂という破局にまで達する。メーヌ・ド・ビランも、「内的日記」において、肉体に、また政治活動に、社交生活への本能的欲望に、思索への専一を妨げられつづける苦しみをつづけている。彼らの哲学は、何よりも、自我の内部の統一、生の不変の原理を求めて、自己を苦しみから解放することにあつた。王政復古時代の社会のモラルの危機にあたって、彼らの苦しみと絶望感はますます大きくなり、外にはなく内に沈滞した彼らは、全存在をあげて、唯一の絶対者なる神をよび求めるにいたる。彼らの宗教は、当然神秘主義に走った。ランベールは、自ら意志力により、神との神秘的融合

の中に自我を解放しようとする。ビランも、自我の神の中への解放を思索するとき、神秘的恍惚感を味わわずにはいなかった。

③ 神秘思想によるシステムのメタフィジックな完成

神秘思想は、彼らにとって魂の要求であるとともに、その哲学をより発展させようという要求にもよるものであつた。意欲する自我には限界があり、意志は人間にとって究極の解決法とはならない。彼らはそのことを、何よりも自己の問題として感じた。こうして、普遍的な絶対的な自我を求めて、同時に時代のために、宗教と哲学とを一体とした新しい人類のモラルを求めるという意図をもつて、彼らは最後のメタフィジックの段階に至る。一八二三年の「新人間学試論」において、ビランは、物質から精神へ三段階を経て上昇していく人間性のヒエラルキーを示した。下部に快楽、苦痛などの肉感に支配される、人間の無意志的存在である動物的生活があり、上部に人間の意志をこえた精神的な生活があり、この中間に、両者のかつとうする不安な状態があり、意志によって支配される人間的生活がある。努力が、欲望と折りを通して、人間を第二の圏から第三の圏へ導く鍵である。自我は、神への「愛」の中に、全身を創造者にゆだねる。ここに人間の意志のたたかいはやみ、神との融合の中に、解放された自我はついに安息を見出す。一方、神秘的瞑想の時期のランベールは、本能―抽象―特殊という語を用いて、全く同じ人間の段階説をのべている。

云うまでもなく、メタフィジックのこの理想は、彼らの上には実現されなかつた。生きている限り彼らの苦悩はやむ時がない。メーヌ・ド・ビランとランベールは、その人間学以上に、人間的な苦悩

によって、我々の心をひきつける。

(2) ルイ・ランペールのドラマと、時代の知的青年たちの知性史

孤立した思想家であったメーヌ・ド・ビランの、主意的な内感の哲学と必理学的分析の方法とは、時代の求めた方向と完全に一致して、彼を、十九世紀思潮史上の一つの大きな流れとなった実証的唯心論の源としている。しかし、同時代に対する彼の影響力は直接的なものではなかった。彼の人柄とすぐれた社交的才能とは、常に彼を哲学的社交界の中心人物としていたが、特に晩年には、ロワイエ・コラル、ヴィクトル・クーザン、アンペールら唯心論者たちが彼の周囲に集り、少なからぬ影響をうけた。この新しい哲学グループの代表であるクーザンは、ビランを師とよぶことをためらわなかった。

十九世紀前半の新しい思潮である唯心論哲学は、十八世紀哲学の継承者であるイデオログの打倒を目ざして、スコットランド哲学の紹介者ロワイエ・コラルによって始められた。ロワイエ・コラルの若き継承者クーザンは、トマス・リードと、とりわけドイツ観念論哲学の影響のもとに唯心論的形而上学の体系を形成し、ソルボンヌとエコール・ノルマルを制覇して二十年代のフランス哲学界の王座についた。クーザンの哲学は、自らえらんだ名称の示すとおり、可能なかぎりの諸派哲学の折衷であり、メーヌ・ド・ラビンの場合のような強力な論理的体系を欠いていたので、やがて実証主義の台頭の下に屈さねばならなかった。また、その思想的政治的中庸主義は、左右両翼からはげしく攻撃された。しかし、感覚論と神秘

主義との中道に、イデオログの動物受的動的人間観にかわり、意志の自由と精神の自発性を主張する自我の哲学を示したクーザンの勝利は、一八二〇—三〇年の十年間には世界的なものとなった。とりわけ、すばらしい雄弁と、二十三才でソルボンヌの教授となり、思想界の指導的地位にたつというかがやかしい成功によって、クーザンは、青年たちの間に魔術的な魅力をふるった。時代の病であるベシシスムに深く蝕まれながらも新しい道をさぐり求めていた知的青年たちの一人、二十二才の懐疑論者ジョフロワは、クーザンによって哲学への情熱と信仰をとりもどし、その後継者となった。二十才のバルザックも、一八一九年のクーザンの歴史的講義の熱心な聴講者の一人だった。バルザックは、三十年以降のクーザンの政治活動に対して批判的だったが、この頃書かれた「哲学ノート」は、感覚論から唯心論へのぬけ道を求める折衷派と同じ位置にたつものであり、また、「ルイ・ランペール」に見られる反響によって、バルザックにおけるクーザンの影響は、一八三五年頃まで認められている。

十八世紀哲学との対決から出発した十九世紀哲学において、統一体系への要求が強くみられるのは当然のことである。個人主義の勝利が自我と社会とのはげしいかつとうという事態にいたってのち、七月革命後のフランス思潮は、統一された人間像を求めて科学的実証主義、社会主義の方向へ向かっていく。しかし、ドイツ・ロマン派との接触と、世紀末以来の接神論派の流行の土壌とによって、スピノザとスエーデンボルグが一つの流行をつくり、汎神論的神秘思想が、思想、文学、科学、すべての領域において、知的エリートたち

の魂を癒しがたく魅惑した。哲学者たちの一元論への要求は、とりわけ、スピノザの影響をうけた。メーヌ・ド・ビランの例が示すように、個人主義、主意主義のただ中で超自我、超理性の要求にとらえられ神秘思想へ向うのは、時代の人間の精神の一つの傾向でもあった。クーザンの中庸主義も、しだいに、汎神論へ傾いていった。

ルイ・ランベールの知性史は、このような時代の精神の動向を伝えるとともに、さらに、イデオログの洗礼のもとに、哲学により自己形成をはじめた時代の知的な青年たちが、唯心論への志向との間に、さまざまに経験したにちがいない、自己形成の途上での思想的かつとうを、内部の混乱を、あらわしているように思われる。ランベールのパティックなかつとうのドラマは、バルザックが生涯のがれられず苦しんだ心理的思想的三元論のあらわれであるのだが、バルザック自身の形成を通じて、それは、時代の知性史としても位置づけられるのだ。人間論における唯物論と唯心論との対立、認識の方法における分析と直観との対立、科学的実証への志向と神秘宗教への渴望との自我における対立、このようなかつとうと苦しみの中で、自我の統一、思想の統一への要求が、渴望される。そして、ランベールのような、神経質で内省的な青年にとっては、社会的自我の統一という方向は完全にとざされ、社会への絶望感はまだ彼を内に向かわせ、ファナチックなまでにひたむきに神秘思想へ没入させていくのである。

ロマン主義時代の作家たちの描いた青年主人公たちの多くは、ランベールのように過敏で神経質で内省的な、自意識的なタイプである。しかし彼らは、とりわけ心情の面を強調され、いわば情の人間

像として描かれている。ジュリアン・ソールが意志的な人間像をあらわしているように、ルイ・ランベールは、時代の知的人間像を表現しているといつてよいであろう。それでは、ルイ・ランベールの知性史のアクチュアリテについて、同時代の証言はあったであろうか？「ルイ・ランベール」は、ドイツで大成功を博したが、フランスの文壇では、多分に美学的見地から、ほとんど黙殺されてすぎた。ただ、一部に、深く感動しこの作品を愛した人々がいた。たとえば、バルザックの知己できわめて知的な女性であったと云われるカロー夫人は、心からの讃美を示したし、バルザックが思想的に大きな影響をうけ、とくにこの書を献じた解剖学者ジョッフワ・サン・チレールは、その深い思想の表現に讃辭を惜しまなかった。

くだって、一八五二年のフロベールの書簡の中に、我々は彼の、この書を読んだときの彼の感動を見出すことができる。⁽⁹⁾フロベールの感動は、一つには、哲学小説の筆をとっていた彼は、この年、「メタフィジックな、幽霊の小説」のプランをもっていたのに、それがほとんどそのままバルザックによって書かれてしまっていることを発見し、ルイ・ランベールの中に、自分の神秘への性癖とそのため狂乱の恐怖とを見出したためであり、また一つには、ルイ・ランベールの中に、青年時代の形成期に非常な影響をうけた亡友、アルフレッド・ルボワトヴァンの面影を認めたためであった。

△このランベールは、いくらかの事実をのぞけば、私の可哀想なアルフレッドです、△この本は、一晩中、私にアルフレッドのことを夢想させました▽フロベールの、特にその初期に著しい哲学への趣味、汎神論への傾向は、彼の生活において、知的形成において、

はなれがたく結びついていたルポワトヴァンの影響であるとされている。

ところで、ルネ・デジャルム氏によって述べられているルポワトヴァンの肖像は、その気質と知性において、われわれの主人公と非常に似ている。⁽⁹⁾彼は、二十年代の青年の心の病をうけついで、ベシミストであったが、彼においてはそれは、外的環境よりもその気質によるものと考えられる。すなわち非常に虚弱で（一八四八年、三十二才で死）、感受性が鋭くデリケートで、したがって外界の影響に左右されやすく、内省的で思索を好む一方、感覚の誘惑に弱く、いつも内的矛盾に悩み、精神は不安定だったことである。また、彼は哲学趣味の強い文学青年で、神秘的なものにひかれる唯心論者であり、スピノザ主義者であった。フロベールによれば、ルーアン中学校時代の彼とこの五十年長の友とは、ヴァンドーム中学校におけるランベールと語り手（この場合はいずれもバルザックの分身なのだが）と同じように、知的に結ばれた仲であり、形而上学の問題を論じて何時間もすごすような仲であった。⁽¹⁰⁾“*うせん*” La Spirale と題された前述の小説のプランは、断片のみが残されていて、彼はここにスピノザの汎神論の思想と、思考の陥る幻覚、狂気の世界を描き、友ルポワトヴァンを登場させるつもりであったという、その片鱗がうかがわれるのみである。ともあれ、やや時代は下つても、ランベールの知性史のアクチュアリテは、ルポワトヴァン＝フロベールによって、一つの確かな証言をもっているわけである。

(3) 小説のテーマとしての“知性”、あるいは“知的人間”

ルイ・ランベールの知性史が、バルザック自身の問題をあらわしているばかりでなく、アクチュアリテにおいても興味深いものであることを見てきたのであるが、最後に、小説論的な一考察を試みて小論のしめくりとしたい。天才における人間の知性の偉大な姿を描こうとしたバルザックの野心的な試みは、美学的見地よりみても、“ルイ・ランベール”において実現されたであろうか？

この試みの困難さと失敗の予感、しばしばバルザック自身よつてのべられている。彼はこの作品の推敲のため数年をかけて苦心した。作中では、天才的幼少期から青年の初期にかけての未完成の姿のみを描き、それも話者の目によって不完全に断片的にのみ示すなどの技巧が用いられている。さらに、バルザックは、天才の心理と知性を自然主義小説体でリアルに描く欲望と、天才を神秘化して描く欲望とをあわせもっていたので、構成上の不統一をまぬがれえなかった。とはいえ、ランベールの人間性には一貫した発展による内的統一がある。それは、彼は、もともと、この時期に完成されたバルザックのドラマトルギーから生み出された人物だからであり、その上、知的生活の克明な描写に執心したバルザックの努力によって肉づけされたランベールは、そのパテチックな運命と思想の深みとによって、深く心をとらえずにはいない人間像を示している。

ランベール像の不完全さは認めるとしても、これ以上に描くことが可能であろうか？ 少くとも小説においては、いかなる作家も、バ

ルザックのような試みを成功させてはいない。チボーデの“小説論”は、小説のテーマとしての知性の問題に大きな部分を与えているが、彼によれば、いかなる作家も天才を創造することは不可能である。作家は、モラルにおいては自己よりすぐれた人物を創造することはできるが、自己よりすぐれた知性を描くことは不可能だ。作家が知性を小説化して成功する場合は、自分より劣った知性を描くか、バルザックが“絶対の探究”において成功したように、知性を外面から日常生活の中に描くかのいずれかであろう。

では、天才としてではなく、一青年の知性をあらわしたものである。このランペールはどうか？一八六一年、テーヌは、自叙伝風の青年の知性をテーマとした小説“エチエンヌ・メイラン”を書きはじめたが、やがて、困難を感じてペンを捨てた。“小説の美学”でチボーデはこのことをとりあげ、“思考しはじめる青年の知性”を小説化することの困難をのべている。とりわけ、この場合、作家は、自己の知性史を語ろうという誘惑にとらえられる。しかし、自叙伝化する作家のペンから生ける人間像が生み出されることはきわめてまれであり、“エチエンヌ・メイランの失敗はテーヌの失敗にとどまらず、ジャンルの失敗である”。バルザックもまた、自叙伝を語るという方法において、“無定形の人物、少年らしからぬ少年”であるルイ・ランペールを生んだ。

十九世紀小説を通じての大きな特徴は、世紀末にいくたの“知識人の小説”を生むにいたる、“知性”を描くことへのはげしい情熱である。ブルジェの“弟子”の成功以前、すでに、一八六一年のテーヌをとらえていたこの傾向は、ロマン主義文学とともににはじま

っている。フランス文学を通じて一貫してみられる、観念へのあきらかな志向は、新しい、知的エリートとしての自己を強く意識したロマン主義者たちに、とりわけ著しくあらわれ、彼らは、予言者であり指導者である詩人や、天才ゆえに苦悩する芸術家の姿の中に、彼らの誇りと責任感をうたった。青年バルザックの哲学への情熱から生れた“哲学研究”諸作品は、小説においてはじめて、この時代の新しい志向を実現したのであり、以後あらわれる哲学小説や知識人小説の先駆けとしての意味をもつてであろう。

ルイ・ランペールにせよ、バルタザール・クラースにせよ、バルザックの人物たちが、以後の文学に描かれた知的人物たちと異る魅力をもっているとするれば、それは、彼らが知的面のみならず情も意もあわせもった人物であり、しかも、それぞれの能力が最高の発現をえている、全人的人間像として示されているからであろう。チボーデの云っている、知性を小説化する場合問題となる、知的生活とロマネスクな生活とを伴う人物の中に結合するということは、こうしてある程度まで解決されている。われわれは、バルザックの人間解釈と小説技巧との成功を見ると同時に、時代の知性観の変化を見ないわけにはいかない。バルザックの時代には、ロマン主義的エラン・ヴィタールの信仰が知性の面にも反映して、解放された知性のよろこびと、その能力に対するほとんど絶対的な信頼とがあった。ルイ・ランペールにみられる、人間の知性をあのように正面から克明に描こうとする、今日では奇異なものにさえ思える情熱は、何ものをも解明せずにはおくまいとする時代の合理主義の精神と、きりはなしては考えられない。時代の移りかわりとともに、選ばれた人

としての知識人の自信と誇りは変形していき、バルザックやヴィニ
ーによって、苦悶、破滅という逆説的な形で、その崇高な、偉大な
姿を描かれた知性は、フ・ベール以後の文学では、人間の病や不幸
をあらわすようになった。小説における知性が今後、さまざまな形
で試みられるにしても、ルイ・ランベールの人間像は、描かれるこ
とはないかもしれない。それゆえに、文学史の上からみても、この
バルザックの人物は、記念すべき創造であったと思われる。

註

- (1) H. Evans : "Louis Lambert et la philosophie de Balzac,"
p. 176~178. (José Corti)
- (2) メーヌ・ド・ビランについては以下の書による。澤瀉久敬著
「メーヌ・ド・ビラン」(弘文堂 E. Naville : Maine de Biran,
sa vie et ses pensées" (Joel Cherbuliez), A. de Lavalette
Monbrun : "Journal intime de Maine de Biran", (Plon)
- (3) Naville,
- (4) Journal intime. 27. Octobre. 1823.
- (5) この唯物論の起源は、バルザックの形成期の初期の、コンデ
イヤック・カバニス、及び王政復古期の医学理論の影響であ
る。
- (6) ただし、ランベールの神秘思想がバルザックの魔術的世界観
によって、汎神論的異教的性格をもっているのに対し、メー
ヌ・ド・ビランのそれは、キリスト教的である。ナヴィルによ
れば、ほとんどフェムロンのそれに近い。
- (7) Balzac ; Correspondance 2, (Garnier)

- (8) Flaubert : Correspondance 3, (Conard) p. 76-78
- (9) R. Descharmes : G. Flaubert, sa Vie, son Caractère
et ses Idées avant 1857." p. 48-51.
- (10) E. W. Fischer : Un inédit de Gustave Flaubert : La-
Spirale (La Table Ronde 1958. p. 96-124)
- (11) A. Thibaudet : Reflexions sur Le Roman, (Gallimard)
-xv. Le roman de l'intellectuel p.138-145
- (12) 「ルイ・ランベール」に述べられているバルザックの神秘思
想の源は、多くの研究にもかかわらず未だに決定的な答をえて
いない。バルザックがその魔術的世界観を、ジョーン・ロウ・サ
ン・チレールやスエーデンボルグをかりて表現したとみられる
この思想は、汎神論的である。エヴァンスによれば、二十才頃
のバルザックは、「エチカ」翻訳を試みかけたこともあるとい
うが、バルザックにおけるスピノザは、すべてその影響をまね
がれなかった時代の科学の読書を通じて、間接的に吸収された
ものと考えられる。